小学校の教育現場と養成校の課題

白梅学園大学子ども学部子ども学科
准教授　増田　修治

1．学校現場の状況

次のグラフは、文部科学省のホームページに掲載されていた、「東京都の公立学校の休職者数」と「精神疾患による休職者の全国と東京の比較」である。東京都の休職者数が年々増加していることと、精神的疾患の割合が全国と比べて高いことがわかってもらえるのではないだろうか。

２０１０年12月25日の朝日新聞によると、都道府県別で「精神疾患による休職者の割合」が最も高かったのは、沖縄1・14％。続いて大阪0・94％、東京0・9％と、割合として全国3位となっている。

あわせて、「条件付き採用」の様子を見てみたい。「条件付き採用」とは、教師1年目は採用試験が通り、教員に採用されたとしてもきちんと勤務を全うできるかどうかを試される期間であり、問題があった場合には採用を取り消すことが出来るというものである。

文部科学省の調査によると、この「条件付き採用」で、平成21年4月1日から6月1日までに「正式採用」とならなかった人数は、東京都が87人と全国トップであり、そのうち精神的疾患が22人となっている。精神的疾患で「正式採用」にならなかった人数を見ると、2

位が埼玉県と神奈川県の6人であり、それ以外の都道府県は全て6人以下の1けたの人数となっている。

2．善意の積み重ねが、新任教師を傷つけるとき
～臨床教育学のすすめ～

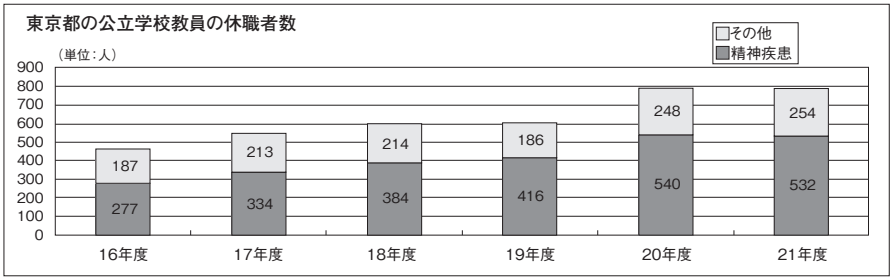
(1) 新任教師からのSOS

私が開いている教育実践研究会のメンバーに、吉田さん（仮名）という今年の4月に教師になったばかりの女性教諭がいる。その吉田さんから、SOSが入った。それは、次のようなメールであった。

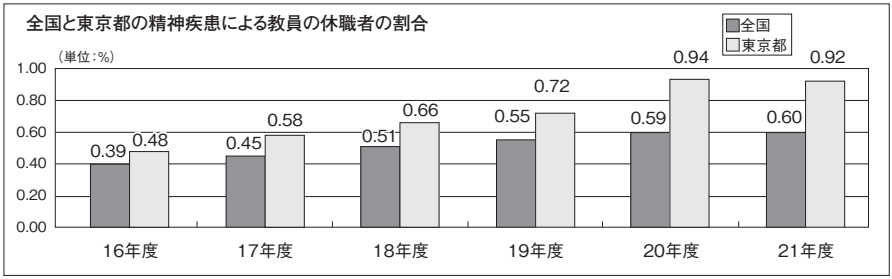
「今、学級経営のことで悩んでいます。特に運動会のあとからクラスの落ち着きがなく、保護者の方が心配をしています。それで、今度 保護者の方が学習支援というかたちでクラスに入るということになりました。私にも相談があったあとなのですが、すぐに校長にも相談がいき、入ってもらうということになった。と言われました。ルールも何もないままはじまるとあらぬ方向にいくのではないかと心配なのですが、増田先生はどう思われますか。」

電話で詳しく聞いてみると、木曜日にクラスのある母親から本人に電話があり、「うちの子が『授業中うるさくて、先生の声が聞こえない』と言っています。クラスは大丈夫なのでしょうか?」との話だった。「確か

（参考）
東京都公立学校教職員休職者の現状（平成16年度から平成21年度まで）



注　休職者数は、都が任命している公立学校教員の精神疾患による休職者数



注　東京都の休職者の割合は、本務者で精算

に落ち着きに欠け、少しうるさいかもしれません」と答えると、「大変ですね。何かお手伝い出来ることはありませんか。親が授業のお手伝いに入ってもかまいませんよ」との善意の言葉をもらったのである。

吉田さんは、「校長や学年の先生とも相談してみます。その後、お返事しますね。」と言って電話を切ったのである。そう言ったにも関わらず、翌日その親が来て、「学級の様子が心配なので、クラスに入る形をとりたい」と校長に言いに来たのである。その日は出張で吉田さんがいなかったのだが、結局、その親と校長との間で話が勝手にまとまってしまった。出張から帰ってくると、校長から吉田さんに「学級が大変だから、親が学習支援の形で入ることになった。地域のつながりを作る上でもいいことだと思うので、決めさせてもらった。学年の先生等には、あとで私から言っておく」と決定事項であるかのように言われたのである。そのことに悩んで送ってきたのが、紹介したメールであった。

⑵善意が新任教師を傷つけるとき

校長と教師が勝手に決めたことを、新任教師に一方的に伝えてくるという事例は、この事例に限らず、至るところで聞こえてくる。また、何か親から文句を言われた時に、校長が「とにかく謝りなさい」と新任教師に伝える。「私は悪くないのに…」と思いながらも、頭を下げさせられる。そんな事例も数多い。こうしたことによって、新任教師のプライドはズタズタに引き裂かれていく。

校長としては、「事を荒立てたくない」「新任教師を守る」といった意味でやっているのかもしれない。しかし、そうした善意が新任教師を傷つけていることを知っておいて欲しいと思うのである。

新任教師は、ただでさえ迷うことが多い。そんな新任教師が、プライドを持つことがおかしいと言われる方もいると思う。しかし、教師からプライドを奪ってしまうことが今後の教師人生にどれだけ大きなダメージを与えるかを想像してみて欲しい。

⑶具体的な指導が新任教師を救う

私は、吉田さんを研究会に呼んで、丁寧に話を聞くことにした。聞いてみたところ、本当に大変な状況に置かれていることがわかった。箇条書き的にいくつかあげてみたい。

①すぐに暴力をふるう子が数人いる。

②何かいいことをすると、「いい子ぶっちゃって～」とからかう。

③授業中手紙のやりとりが頻繁にある。ある時は、「吉田先生が嫌いな人は、名前を書くこと」という手紙が回され、ほとんどの子が名前を書いていたこと。

④聞いてみると、「名前を書かないと、あとで何をされるかわからない」と思って書いてしまった子がたくさんいたこと。

その他にも、大変な状況が話された。同時に、同僚が励ましてくれるのだが、具体的な手立てを教えてもらえないので困っていることなども話してくれた。私は一つひとつの事例に対してのアドバイスをし、学級崩壊を起こさせているグループの存在とそれに対しての指導、まわりの子どもを教師の味方にしていく具体的な手立てなどを噛んで含めるように教えたのである。まず誰に働きかけていくか、その時に何をどのような順番で話すかなど、具体的な指導も教えていった。それだけで、3時間近くかかってしまった。

帰りぎわの吉田さんは、来た時とは別人のように明るくなっていた。具体的な手立てが見えた時に、人間はやはり元気になるのではないだろうか。

⑷追い詰められている原因を考える

いま、多くの若い教師たちが追い詰められている。その原因は、何だろうか。それは現在、かってない「教室の困難さ」が存在しているということである。それはまさに、今日の子どもたちの「発達異変」とも呼ぶべき様相と言える。

ちょっと怒っただけで、「先生に、おこられた〜。」とわめきながら、廊下で椅子をガラガラ引きながらわめきちらす子の例が、私の研究会で報告された。しかも、学校中の廊下でやられるのである。これだけで、教師は精神的にまいってしまう。

学校に入学しても、教室での秩序が理解できず、「ブランコの順番」という概念すらない子どもや、暴力をすぐにふるう子、ものすごく自己中心的でわがままな子などが激増している。

そこには、一人の教師ではどうにもならない、現代日本の子どもが育つ条件の深い危機が存在している。「現代の貧困」の中で幼少期に必要な愛情を得られず、年齢に応じた発達保障がされていない不幸は、子どもの罪ではないのでないだろうか。

若い教師を叱責する校長や指導主事たちの年代が経験したことのない困難を背負い、時代の「負債」を引き受けて現代の若い教師は教壇に立っているのである。そのことを理解したうえで若い教師たちを指導していかなければ、すぐに辞職してしまったり、精神的な疾患を煩ってしまうに違いない。「今の若い教師は我慢が足りない」と言われるが、そんな問題ではないのである。

現代の子どもの姿をしっかりと見つめ、「あるべき姿」から出発するのではなく、「今ある姿」から出発し、指導を組み立てていくという教育に対しての考え方そのものを変えていく必要がある。そうした視点を、管

理職や指導主事、全ての教員に学んで欲しいと思っている。そのことが、きっと子どもへのとらえ方を深くするはずだし、若い教師と子どもたちの幸せを創り出すことにもつながるのではないだろうか。

3．白梅独自の「ガイドブック」の作成

こうした状況を打破するために、東京都教育委員会は、「小学校教諭教職課程カリキュラム」を独自に作成し、大学の教員養成をもっと現場に即した人材に育てるように組みかえることを要請してきている。私たち白梅学園大学の小学校教員養成課程の担当者は、東京都が作成した「小学校教諭教職課程カリキュラム」をもとに、「小学校教諭をめざす人のためのガイドブック」を早急に作りあげ、2月現在ですでに印刷所に発注している。東京都のカリキュラムだけでなく、「小学校教諭の魅力」「小学校教諭になるまでの道筋」「小学校教諭に必要とされる力」などを盛り込んでいる。

小学校教諭は、すぐに現場で担任を任されることが多い。特に、東京都はベテランの先生方がどんどん退職し、そのかわりに大量に若い先生方を採用している。そのため、1年目から担任を任されるだけでなく、新しく入ってきた新任教諭の相談に乗るといった余裕がなくなっている。なぜなら、若い先生方はどうしても自分のことだけで精一杯になってしまうからである。本来なら、若い先生が自分の学級に専念する環境を整える必要があるし、自分の学級に専念する権利があるはずだと思うのだが、多忙な現場の中ではそれが許されなくなっているのが現状である。

だからこそ、現場1年目からなんとか困難な状況を乗り越えていける学生を育てるために、大学独自で「小学校教諭をめざす人のためのガイドブック」を作成したのである。大学1年生の段階から、小学校教諭に必要な力を意識して学んでいって欲しいと考えたからである。

4．教員養成校である白梅学園大学の課題

この「ガイドブック」の作成と同時に、白梅学園大学の教員養成課程では、各指導法において、指導案の作成に力を入れるように担当の先生方に依頼している。また、私の担当している「教職実践演習」では常に現場の状況から出たレポートなどをもとに、その解決策を探るようにしている。次の感想文は、２０１０年度に卒業する4年生のものである。

学校現場におけるいじめや、不登校、学級崩壊、モンスターペアレント、学力低下など、様々な課題・問題について、増田先生の実践及びテキストの具体例を

用いて、臨床教育学という科学的な視点からアプローチしていった。この方法は、教育の一場面を客観的・具体的に捉え、事実を抜き出していく中で、問題となる部分や子どもたちの様子などを整理し、違う場面との比較を通じて教師の対応を探っていくものである。

私は、最初このアプローチの方法について、どのような手段、手順で進めていけばよいのかわからず戸惑いもあったが、『なるほど、そういうことか』と徐々に納得できる場面が増えていった。

特に、納得できたのは学級崩壊についての事例を検討する時である。グループのメンバーそれぞれで気づいたことを短冊に書き出し、それを模造紙に貼るのである。すると、私自身が気づいた事と一致するものや、似たようなものをまとめることができた。こうすることで、気づいたことを整理し把握できる。しかし、この方法で最も良いと感じたところはこの部分ではない。それは、自分自身では気付かなかったことを、他のメンバーが気づいたことを共有することができるところである。このことによって、情報を共有することができ、より具体的に問題・課題についての対応を考えることができるのである。一目で事実や問題点を把握できることで、誰もが同じスタートラインから考え始める事ができるのである。

学生達は、現場に出て様々な困難に出会うことだろう。しかし、そうした困難さのみに目を奪われるのではなく、それをどのようなステップで解決していくかという実践的な目を育てていくべきである。また、問題を科学的に分析していく能力もある程度身に付けさせてから、大学を卒業させたいと考えている。

まだまだ不十分な面があるが、現場の困難さに立ち向かうことができ、しっかりとした学問の基礎を学べている学生を巣立たせたいと思っている。それが、養成校である白梅学園大学の課題であるし、小学校教員養成課程に関わる私たちの課題だとも考えている。